

### 1 ■ プルーストの生涯

- ・ 1871年、パリ郊外のオートウイユの生まれ。父はパリ衛生大学教授、母は裕福なユダヤ人金融業者の娘。若い頃は社交界に出入りし、そこでさまざまな体験をする。両親の死後、人生の最後の十余年を、彼は外界の物音を遮断するために壁にコルク板を張りつめた密室に閉じこもり、小児期以来の持病の喘息に苦しみながら、外出は最小限に切りつめて、昼眠り、夜通し起きて『失われた時を求めて』(未刊)の執筆をした。1922年没。

### 2 ■ 『失われた時を求めて』

- ・ ただ1冊の全生涯をささげた作品。
- ・ そこには、恋愛の悦楽と嫉妬の苦悩があり、さまざまな芸術における美的体験の深化の過程があり、第三共和制下のフランスでの、二つの階級にまたがる社交界の人間模様があり、…プルーストの生きてきた時間のすべてがある。
- ・ この小説の主題は「時間」である。「longtemps」~「Temps」

### 3 ■ マドレーヌ菓子

- ・ ある日「私」は、お茶に浸したマドレーヌ菓子を口に含んだ瞬間、過去の思い出が鮮烈な色や香りを保持したまま、不意に蘇ってくるのを感じ、激しい喜びにとらわれる。  
→プリント「プチット・マドレーヌ」
- ・ ここから、「失われた時間」としての過去の歳月をめぐる「私」の探究が始まり、全七巻にわたる広大な小説世界が開かれることになる。

### 4 ■ イリエ

- ・ プルーストが少年時代に休暇を過ごした北フランスの村。小説の中では、コンブレ。現在は、この小説中の架空の地名にちなんで、イリエ=コンブレと改称されている。

### 5 ■ コンブレの二つの道

- ・ パリのブルジョワであるスワンの別荘へ向かう道と、名門貴族のゲルマント家の城館へ向かう道の二つの散歩道があった。  
→幼年期の「私」(語り手≠プルースト)が抱いていた夢や憧憬の二つの方向を暗示する。  
→成長した「私」がやがてパリで経験することになるブルジョワのサロンと大貴族のサロンという、二つの対照的な人間模様の空間を先取りする。

### 6 ■ 二つの道の結合

- ・ 最終篇『見出された時』の結末で、スワンの娘ジルベルトとサン＝ルー伯爵との間に生まれた娘、すなわちスワンとゲルマントの二つの血筋が混ざりあった存在が「私」前に現れた時、いわばこの二つの道が「私」の中で溶けあい、最初と最後が合致して円環が閉じる。
- ・ 過去の無意志的蘇りこそ生きることに意味を付与してくれる本質的な体験であり、この欺瞞を永遠不滅たらしめることこそ芸術家の使命であるという認識とともにこの大長編の幕が下りる。

### 7 ■ スワンの恋

マルセル・プルースト  
『失われた時を求めて』から

### 8 ■ 『スワンの恋』の背景

- ・ 当時の中流以上のフランス人の結婚の仕方→政略結婚。
- ・ 女性は、結婚して初めて恋愛が可能となる。  
→サロンを主宰(社交界)  
大貴族のサロン→サン＝トゥーヴェルト侯爵夫人邸のサロン  
ブルジョワのサロン→ヴェルデュラン夫人のサロン
- ・ 社交界(モンド)と裏社交界(ドゥミ・モンド)  
社交界…貴婦人の周りに美貌・才気ある若者が集う。  
裏社交界…高級主婦の周りに「金」を持った男たちが集う。  
スワン:社交界の寵児。地位、美貌、教養を兼ね備えた男。  
オデット:名の売れた高級主婦。  
→普通ではありえない組み合わせ。なぜ?→オデットの戦略。

### 9 ■ オデットの戦略

(配布プリント(鹿島 茂 『悪女入門』)を参照)

- ・ ヴァントウイユのソナタ
- ・ ポッティチェルリのチッポラ
- ・ カトレア

### 10 ■ 嫉妬

嫉妬は愛より出でて愛より強し

### 11 ■ レポートのためのプラン(例)

スワンあるいはオタクの恋(題)

スワンの恋では、主人公スワンはオデットへの感情をストレートに表すことなく、さまざまな奇行に走る。たとえば、……。こうしたことから、スワンは今で言うオタク(現実よりも仮想現実リアリティを感じてしまう男)といえるのではあるまいか? [序論=問いを完する]

- 1-ヴァントウイユのソナタ[本論1=証明1]
- 2-ポッティチェルリのチッポラ[本論2=証明2]
- 3-カトレア[本論3=証明3]

以上から、スワンはオデットの肉体そのものよりもその代替物としてのさまざまなモノに惹かれていることがわかる。この偶像崇拜的行動は、現代の青年が漫画の美少女の向こう側に現実の女性を重ね合わせるやり方と酷似している。ベル・エポックは、ある意味では21世紀初頭の文化的状況を先取りしているといえる。[結論=問いに対する答え]

### 12 ■ まとめ

- ・ プルーストの描く社交界は、パリを中心として形成されてきた、遠くヴェルサイユにまで遡るフランス社会の一つのモデルであり、現代フランスを考える上でも看過できない権力構造をなしている。次回以降は、こうした中心が、周縁である地方から、さらには植民地からどのように相対化されるかを考えてみたい。

レポートのためのヒント(ka1)